

(講演原稿をPDF化したのでパワーポイントによるスライドショーは残念ながらご覧いただけません。文中の写真説明の部分は赤字になっています)

タイトル

「世界文学を学ぶ会」発足の背景

皆さま、こんにちは。今日はお忙しいところご来場ありがとうございました。「世界文学を学ぶ会」を立ち上げ今日が初回、試行錯誤しながらのサークルの講座になりますが、宜しくお願い申し上げます。

最初に会の発足の背景を申し上げます。

実は府中にある「TAMA 市民塾」(TAMA はローマ字で、昭島市の公民館やこのエンシスにも年に2回、受講生募集のチラシが置かれています。講師の募集もあり、私も一昨年、世界文学紀行とのタイトルで応募したところ採用され、昨年の4月から半年間のスケジュールで講座が持たれることになっていました。

ところがこのコロナ禍で1年間休講となり、講座によっては開催不可能になるものもあつたのです。

最終的に私の講座については今年の10月から開催、との通知を受け取りました。でも、講師は三多摩全体から行っていますが、受講生は府中市内の市民が多く、わざわざ昭島から行く人は少ないだろう、との思いから、せっかくなら地元の昭島でもと、取り上げる作品数も増やして1年間で、と思いついた次第なのです。

定年後に作品の舞台を訪ねた数が15になり、所属する講師団体としての法人シニア大樂の紹介で、都内あるいは近県でときどき単発で、あるいは、いくつかの作品を合わせて何回か講演をしてきましたが、まだ全体を総括するという機会はありませんでした。

せっかくの文学紀行が多くの方の役に立つ機会があればこんな嬉しいことはない、自分の年齢も考え(今年80になりました)、文学紀行の総括をする最後の機会と思って力を入れているところです。

アキシマエンシスでこうした会の立ち上げには原則として発起人が必要です。初めからこの講座の参加者が決まっているわけではなかったので、私が担当させていただいているイキニコの英会話教室の生徒さんのご了解で名前を貸させていただきました。追って「風と共に去りぬ」、「赤毛のアン」「ロミオとジュリエット」「ハムレット」など英語で書かれた作品では原書の一部をかじってみる予定もあるので英語の勉強にも役立つだろうと思ったからです。

今日ここにそのうちの何人かがお見えになっておりますが、ご協力ありがとうございました。

ほかの方々には私がお付き合いいただき、またお世話になっている、シルバー人材センター、昭島の国際交流部会、早稲田大学の校友会である昭島稲門会、つつじが丘団地のシニアクラブ、また近隣で親しくさせていただいている方々等にご案内を出しました。

同じ市内のことですので、この会場にお互いにお知り合いの方もいらっしゃるかと思えます。皆さんの交流の場にも役立っていけばとても嬉しいことと思っております。

講座は原則、毎月第3金曜日のこの時間に1年間で12回。今日の講座をご覧になり、面白そうだったら続けて参加していただければ嬉しいです、ご自分の興味ある作品によって参加いただくことでも結構です。お友達を誘っていただくのも大いに歓迎いたします。

ご案内が長くなりました。さっそく第1回のテーマ「ドン・キホーテ」に入っていきたいと思えます。かなりの長編ですが「ドン・キホーテ」をお読みになった方はいらっしゃいますか？<挙手を依頼する>

読んでいらっしゃる方は後半の時間に、ご自分の読後感や参考情報などを話していただけますと嬉しいです。まだ理解の浅い私自身も皆様からもいろいろ教えていただけますとありがたいです。

「東京のドン・キホーテ」の由来

私は定年後「ドン・キホーテ」の舞台ラ・マンチャを訪れ、セルバンテスの生まれた町の新聞に「日本語を話すドン・キホーテ」と紹介されてから、自分に「東京のドン・キホーテ」との名前を付けました。

私のホームページのタイトルも「ドン・キホーテの広場」、名詞にも「ドン・キホーテを生きる自愉人」と刷り込み、メールアドレスにも「donky」がついています。

——なぜ、私がドン・キホーテなのか？

それは、小学校の6年生までさかのぼります。学芸会にクラスで『ドン・キホーテ』の劇をすることになり、私がドン・キホーテの家来サンチョ・パンサ役を演じたのがきっかけでした。

以来、その奇想天外なストーリーに惹かれて少年向けの本を、大人になってからは長編の全訳本を読みふけたものでした。

また、信濃町にある日本スペイン協会で、原書による勉強会があったとき、週に1回、1年間出席。

さらに、先代の松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」も時と劇場を変えて計3回、見に行きました。かなりの凝り性だったといえるかもしれません。

ということで、400年前、槍を掲げ愛馬ロシナンテに乗っていたスペインのドン・キホーテに対して、私め、現代の東京のドン・キホーテは、槍の代わりにカメラを掲げ、馬の代わりに飛行機に乗って“見果てぬ夢”に向かって世界文学の旅を続けてきた次第です。

セルバンテスは58歳のとき作品の前編を、68歳のときに後編を出版しました。5年前の2016年は亡くなってから400年という区切りの年でした、奇しくも亡くなったのがシェイクスピアと同じ年だったので、この年の昭島稲門会の総会の際には「没後400年のシェイクスピアとセルバンテス」とのテーマで講演をさせていただきました。

スペインの大学に定年留学

私は現役時代に特派員として10年間、パナマに駐在しラテン・アメリカ（中南米）の国々を回っていました。これらの国はブラジルを除き基本的にはすべてスペイン語です。

私のスペイン語は35歳からの現場で叩き上げて身につけたスペイン語だったので、定年後には学問的にも系統立てて勉強し、少しでもそのレベルアップをすることと、小説『ドン・キホーテ』の勉強のために、南スペインのマラガ大学に1年間留学しました。

そのとき、作品の舞台・ラ・マンチャも訪れ、教室で「ドン・キホーテ」についてのプレゼンテーションをし、また少しばかりのリポートも書きあげました。

スペイン地図 →地図の各場所を説明する。

留学の時の写真です。

休憩時間中のマラガ大学の外国人向けスペイン語教育校舎の入り口付近

教室の授業風景、とてもリラックスしています。留学生は主に他のヨーロッパ諸国、北欧の国からが多かったですね。それと北米から。中にはアフリカのナイジェリアからも来ていました。生徒は全体で200人ほどで、日本からは現役の大学生が3人とOLが1人。すべての学生の中で私は最年長でした。

(なのに、仲間は私のことを「タケシ」と呼ぶんですね。これの方が「Sr. Shimizu」「Mr. Shimizu」よりはるかに親しくなる。英語でも同じですね。つい先頃まで「ドナルドとシンゾー」20数年前には「中曽根首相とリーガン大統領の間で『ロンとヤス』だったことに通じます」

滞在していたマンションに同じ教室のクラス仲間を招待し日本食等を作って激励、交流したときの写真です。→国名を言う。

地中海の朝焼け、冬の2月頃の光景です。

そして留学から帰国して3年目の2005年。『ドン・キホーテ』出版400周年の年、私は友人のプロカメラマン井部さんと一緒に再び作品の舞台を訪れたのです。

セルバンテスの生家から

セルバンテスの生家

二人の旅はまず作者セルバンテスの生家のある町・アルカーラ・デ・エナーレスへの一歩から始まりました。

マドリードから東へバスで約30分。街に入ると車道の両側には「セルバンテスのドン・キホーテ400周年——作者の町：アルカーラ・デ・エナーレス市議会」といった具合にカラーのエンブレムが置かれ訪問者をにぎやかに歓迎していました。

セルバンテスの生家は400年の歴史をにおわす大きな2階建てでした。中庭を囲むように居間、食堂、寝室、家族また使用人の部屋があり、当時の生活用品がそのまま陳列されています。玄関前の歩道には、ドン・キホーテとサンチョ・パンサの像が置かれていて、観光客の記念スナップの場となっていました。

前日には、この町にあるスペインでは最も古い大学の一つ、1498年創立のアルカラ大学の講堂で、セルバンテス賞の授賞式も行われていました。賞はスペイン語圏の作家にとって最高の栄誉。これにはカルロス国王、ソフィア王妃、当時のサパテロ首相も出席しその意義をとどめていました。

「ドン・キホーテ」の生まれた家ですね。

生家の前のドン・キホーテと従者のサンチョ・パンサと一緒に記念をとどめました。

続いて首都マドリードにあるスペイン広場を訪れました。広場周辺の街の様子です。

スペイン広場。マドリード市内で最も人気のある観光スポットの一つです。大きな長方形の池を前にした広場中央の台座に、やりを掲げやせ馬ロシナンテに乗ったドン・キホーテ

とロバにまたがったサンチョ・パンサの像があります。その後方の高い台座には、作者セルバンテスが小説の主人公の二人を見守るように座っている。セルバンテス没後300年を記念して建てられた、といます。

スペインの至る所でこうした二人の像が見られます。

セルバンテスの肖像

奇想天外な冒険譚

スペインはラ・マンチャの田舎郷士キハーノは、騎士道小説を読みふけたあげく、自ら騎士ドン・キホーテと名乗りを上げ、世の不正を糾すべく従者のサンチョ・パンサを伴って諸国遍歴の旅に出ます。そして旅の先々で奇想天外な冒険を経験するのです。

作品は前編・後編とあり、前編の主な目次項目を挙げてみますと「狂える郷士の旅立ち」「ドタバタの叙任式」「風車に挑む」「旅籠の夜の珍騒動」「羊の大群と戦う」「マンブリーノの兜」「葡萄酒の革袋と大血線」など。

後編では「再び冒険を求めて」「サンチョ、主人をたぶらかす」「鏡の騎士と戦う」「ライオンに挑む」「サンチョ・パンサの名統治」「吟月の騎士に敗れる」「ドン・キホーテの死」などが主な話題になっています。

長編小説の書き出しは次のようになっています。

——ラ・マンチャ県のさる村、名は思いたくない村に、さほど前のことでもなく、槍かけに槍、古びた楯、ひよろひよろ馬にはしっこい狩犬をそろえた、型のごとき郷士が住んでいた。昼は羊肉よりも牛の勝った煮込み、たいていの晩は昼の残り肉へ玉ねぎなど刻みこんだサラダ、土曜日に塩豚の玉子あえ、金曜日にレンズ豆、日曜だと小鳩の一皿ぐらいそえて、それだけに収入の4分の3が消えた——

(原作の日本語訳にはいろいろな人が挑戦していますが、永田寛定<ひろさだ>訳が私にはしっくりきます。＝これから出てくる引用も同じです)

ラ・マンチャ平原の風車を訪ねる

そして、小説『ドン・キホーテ』でもっとも有名なくだりは、主人公のドン・キホーテが遠くに見える風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだ場面でしょう。私たちはその有名な場面の舞台、ラ・マンチャを訪ねました。

「ラ・マンチャ」とはアラビア語で「乾いた土地」、スペイン語で「しみ」という意味です。場所はスペインのほぼ中心に位置し九州全土より少し広いといます。

ラ・マンチャの平原<留学時代に訪れた夏のラ・マンチャと出版400周年でカメラマンと訪れた秋のラ・マンチャと風車>

ラ・マンチャ平原の風車は今ほどれも回っていません。かつては風力を利用して粉ひきに活用されていたものが現在は観光用として活用されています。

タクシーでカンポ・デ・クリプターナの風車の並ぶ丘に上りました。車から降りると風が冷たい。10基の風車が点在しています。だが、今ほどの風車も回っていません。

かつては風力を利用して、粉ひきに活用していたものですが、現在は完全に観光用と化していました。

ドン・キホーテはこの風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだのです。

この部分を永田寛定訳で引用してみますと：

<浪曲調に>——この時、あの大野には今もある粉挽場の風車が三、四十あらわれた。ドン・キホーテは、それに目をとめるやいなや、従士に言った。「天はわたしたちの仕事を、願ってもみられないほど上首尾に、運んでくださるぞ。それ、あそこを見なさい、サンチョ・パンサ。山のごとき巨人が三十ぴき、いや、もちっとじゃろうな、立ち現れたではないか。かれらと一戦におよび、みなごろしにしてくれよう……」

「巨人がどこに」と、サンチョ・パンサがきいた

「それ、あそこに見える長い腕のやつらじゃ」と、主人が答えた。「なかには、腕の長さ二里に達するのさえ珍しくないぞ」

「おめえ様、待ってくんないせえ」と、サンチョ。「あそこにめえるは巨人でねえ。粉挽場の風車ですがすよ。腕とめえるのがね、それ、風でまわって石臼を動かす、はねぎだあよ」

.....

サンチョの止めるのも聞かずにドン・キホーテは乗っているロシナンテに拍車をくれ、一ばん手前の風車に突いてかゝった。すると、槍先がはねぎにふれようとし時、にわかに吹き起こった風が恐ろしい勢いではねぎを回転させたから、槍はぶち折れるし、馬と騎手はそっくりさらわれて、後方へぼんと棄てられ、さんざんな態たらくで、野っばらをころがっていった——

作品の全部を知らない人でもここだけは知っている方も多いでしょう。あまりにも有名なシーンですね。

正義を求め、悪と戦うために槍を抱えて風車に突進するドン・キホーテは理想主義の典型であり、その従者サンチョ・パンサは物質主義の権化という人もいます。

文中には二人の間の滑稽なやり取りや諺が頻繁に出てきます。ドン・キホーテもですが、サンチョ・パンサの言葉もいい。

サンチョとの会話や諺の数々

「人間寝てえるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」

「この世を捨て、地の下へもぐる段になったら（死んで埋葬されたら、という意味ですね）、お大名も日雇もおんなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも召使いのからだも、よしんば背たけに違いはあろうと、占める広さに変わりはない」。

——そう、どんなに偉い人でも寝ていて畳2畳以上を独占することはできません。また、死んだらどんなに金持ちであっても権力者であってもそれを来世に持って行くことは出来ない。死んだらみんな同じになる——人生の究極の真理ですよ。

二人の間でやりとりされることわざは、実に示唆に富んでいます。

セルバンテスは58歳のとき前編を、68歳のときに後編を出版しました。

猪突猛進のドン・キホーテと優柔不断なハムレット。これにゲーテのファーストを加えて、西欧文学の三大主人公と呼ぶ人もいます。

セルバンテスが没したのは奇しくも「ハムレット」の作者シェイクスピアと同じ1616年でした。作品は近代スペイン文学の原点ともなり、聖書に次いで世界で多くの言語に翻訳されているようです。

物語は長編だがわかりやすく面白。しかしながら、それをどの程度深く理解できる

かは、読者の成熟の度合いにかかっているとも言われています。何かこちらが試されているような気がしてきますね。

ミュージカル「ラ・マンチャの男」ではドン・キホーテがつぶやいています。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ、本当の狂気とは。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」——

——夢を持つことの大切さ。また、周囲にどう見られているか、などを気にして自分の信念の道を進まない生き方を鋭く突いています。

ドン・キホーテのことを“年老いた気が狂った爺さん”と見る人もいます。でも私には、滑稽な冒険譚もさることながら、狂気と言われながら、悪を懲らしめ、正義を求め、夢に向かって進む主人公の姿に惹かれるものがあるのです。

ドン・キホーテが騎士の称号を授けられたお城（旅籠）です。

エル・トボソのドン・キホーテ図書館

続いてエル・トボソにあるドン・キホーテ図書館を訪ねました。朝の早い時間ということもあって、他の訪問客もなく、館長自らが案内という幸運に恵まれました。

その昔、トボソ村の村長は考えました。「貧しいわが村はどうしたら栄えるだろうか」。思案の末、思いついたのは、村が小説「ドン・キホーテ」の舞台であることでした。作品は聖書に次いで世界で最も多くの言語に翻訳されている、といます。

「よし、世界中の『ドン・キホーテ』の翻訳書をここに集めて展示しよう」。村長はさっそくペンを取り、各国へ手紙を送りました。翻訳書は続々と届くようになったのです。国家元首、大統領、著名人の署名の入ったものも多かった。

トボソ村は一躍、「ドン・キホーテ」愛読家の訪問地となり、国の内外から観光客が押し寄せるようになった。“村起こし”運動はすばらしい結実を見たのです。

全部で 54 カ国語の「ドン・キホーテ」があるといいます。2 階建ての各階の陳列棚には言語別の翻訳本とスペイン語による短い説明がありました。

本を寄贈してきた国家元首等のサインもあります。アメリカのレーガン大統領、イギリスのサッチャー首相、フランスのミッテラン大統領、ポーランドのワレサ大統領、南アフリカのマンデラ大統領など。なかにはイタリアのムッソリーニからのものもあり、歴史の一段面をのぞかせているようでした。

言語で言えば ギリシャ語、ラテン語、ペルシャ語、ヒンディ語、ベトナム語、トルコ語、エスペラント等もあります。館長は言葉を続けました。「数日前には、南米のエクアドルからケチュア語で翻訳されたものが届いたんですよ」。

スペイン国内でも、バスク語、カタルーニャ語、ガリシア語等の言語もありました。

日本語の訳本のある場所へと急ぎました。2 階の一角の展示棚。1927 年の高田早苗による訳本がありました。

「日本語では、他にも永田とか会田また牛島とかの訳本もあるんですけど……」と私は館長に問いただしました。

「ええ、私も翻訳者の名前は知っています。でも展示場所がないので別途に保管しているんです」と館長の説明でした。

こちらが記者とカメラマンと知った館長は「ところで村長にお会いになりますか？」と誘ってくれた。思いがけず、由緒ある村の村長に会えるなんてこんなラッキーなことはありません。

「ええ、ぜひお願いします！」

案内されすぐ近くの庁舎の村長室で村長のナティビダー・マルチネスさんに会いました。

エル・トボソ村の女性村長と

博物館のすぐ近くには村役場がありました。エル・トボソ村の女性村長にインタビュー
ジーンズにジャンパー姿の女性村長は、完全な仕事スタイルでテキパキと動く名村長と
みえました。村の歴史、訪れる観光客、日本の最新事情等について話が弾みました。

そこから100メートル先には想い姫ドルシネアの生家がありました。

ドン・キホーテは粗野な田舎娘アルドンサを高貴な淑女ドルシネアに仕立て上げたのです。

正義の戦いの報告をするためです。その家は400年前からの農家でした。農具、家具、調度品なども並んでいました。

またエル・トボソの中央広場にはドルシネアにうやうやしくひざまづいているドン・キホーテの彫像もありました。

「ドン・キホーテ」はフィクションの小説です。でもその舞台が今、いろんな意義付けがされ世界中から見学者がやってきている。ここでも「最も多いのは日本人です」とのことでした。

ひとまず私たちの旅も終わりました。作品の舞台で多くの市民とも対話を重ねました。

スペインの学校でも「ドン・キホーテ」がほぼ必須の教材となっているようです。でも、私の会ったスペイン人で前編と後編を読み通したという人は極めて少なかった感じがしました。今からすれば古典で、現代スペイン語とも違い難しいのかもしれませんが。

そのなかでの日本人の「ドン・キホーテ」への関心の高さ。それはこっけいな冒険譚もさることながら、狂気と言われながらも理想に向かって突き進む主人公のどこかにひかれるものがあるからではないか、と私は思っています。

特に未来に夢を描くことが難しい現代の日本の社会にあっては、なんて思った次第です。
このときの紀行文は郷里の信濃毎日新聞に5回にわたり連載され、その一部はまたセルバ
ンテスの生まれたスペインのアルカーラ・デ・エナーレス市の新聞にもスペイン語で掲載
されました。

紙面の上部には「インタビュー『タケシ・シミズ：日本語を話すドン・キホーテ』とあり、
タイトルは『日本も多くのドン・キホーテが必要になってくるかも』となっています。

紙面の真ん中にある日本語の部分は、信濃毎日新聞の連載の第1回目です。

私の“見果てぬ夢”の一端が実現した旅となったのでした。

長時間のご静聴ありがとうございました。